

■石川房次郎 文久元年（1861）～昭和2年（1927）
木工指物師

駿府寺町に生まれる。12歳で木工技術の修行を始め、石川木工所を設立し、主に鏡台木地の生産を行った。弟の甚蔵が片腕となり、木工機を考案し数々の特許を取得したが、木地製作にあきたらず、拭き漆塗りを考案し、明治時代初期に石川商店を創業。

完成品の鏡台が大阪をはじめ各地で好評を得て、静岡鏡台の名を広めた。静岡市議会議員を二期、鏡台組合長を長年務めた。

モットーは「使う身になって物を作れ」であった。

明治10年（1877）8月第一回内国勸業博覧会が東京上野で開催され、初めて西洋鏡台というものが出品された。これは、東京日本橋宝町漆器店木屋林九兵衛の出品であった。この出品と同形のものを明治18年（1885）に大阪の漆器店山本佐助が静岡の岩本商店に注文した。

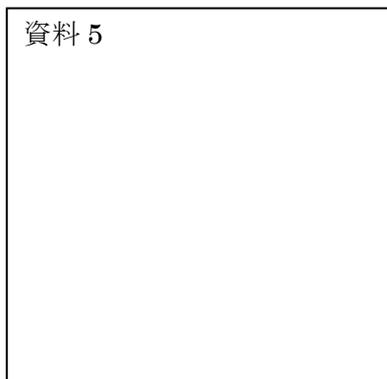
店主岩本庄吉は石川房次郎に製作を依頼し、桑材を利用して漆塗りし大阪へ送ったとのことであるが、本格的な移出には至らなかった。

その後、時代の要請で「西洋鏡台」の名称は一般化し、明治28年（1895）花村清次郎は東京で鏡台製作技術を修得、帰静して新規品で実用的な各種の鏡台を製作し好評を得た。石川も当時の新式鏡台製作には花村の協力を求めている。

石川の指物技術の流れを汲む者として、木工指物に山本勇一、家具指物に森下茂がいる。（二人とも故人、静岡市伝統工芸技術秀士指定者）

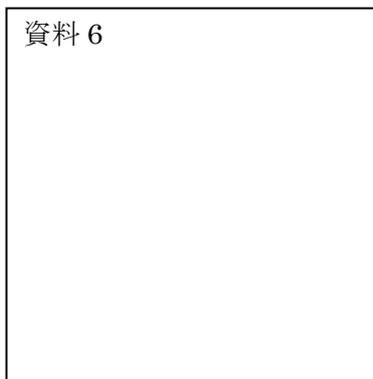
なお、石川房次郎が製作したと伝えられている「桑材拭き漆塗鏡台」を静岡市で保管している。

資料5



（提供 森下木工所）

資料6



（静岡美術商工家鑑）